

令和 7 年度 3 学期

府中市標準学力調査
考察資料

中学校

調査目的

●府中市内の中学校生徒の学習状況を調査し、学習指導要領に定められた学習内容の定着状況を把握するとともに、今後の学力向上および指導の改善に資する。

調査内容

●調査目的に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成した。

調査対象

- 府中市内の中学校の1・2年生の生徒
- 調査対象教科は、国語・社会・数学・理科・英語

◆用語について

正答率

各設問の正答率は、その設問に正答した児童・生徒の割合を示したものである。また、教科総合、領域別、観点別等の正答率は、対象設問中の正答率の平均を表す。

標準スコア

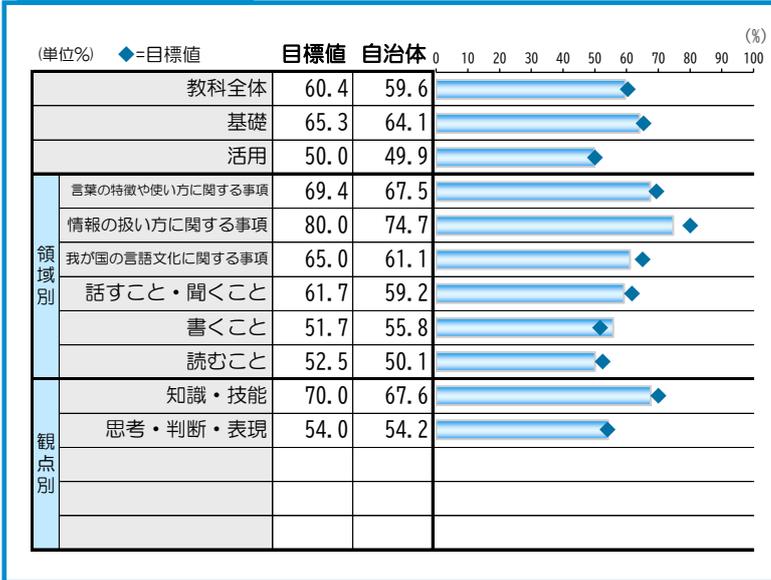
全国平均の正答率を50とした時の換算値。

目標値（目標準拠評価方式のみ）

学習指導要領に示された内容について標準的な時間をかけて学んだ場合、設問ごとに正答できることを期待した児童・生徒の割合。

「知識・技能」の定着に課題が残る

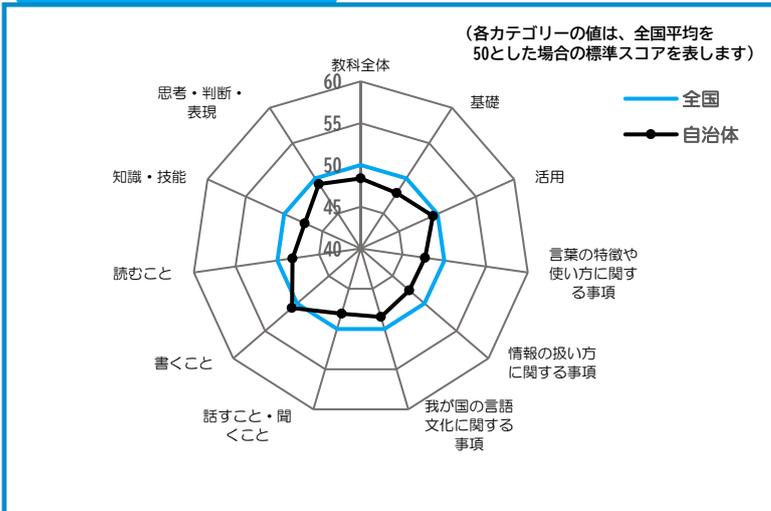
正答率一覧



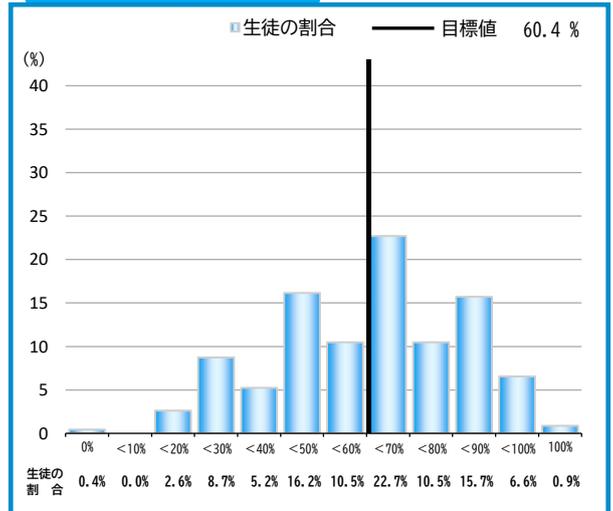
分析 コメント

- 中1国語は、教科全体の正答率が59.6%
- で、目標値を0.8ポイント下回った。
- 観点別に正答率を見ると、「思考・判断・表現」が54.2%で、目標値を0.2ポイント上回った。一方、「知識・技能」が67.6%で、目標値を2.4ポイント下回った。

カテゴリー間の比較



正答率度数分布



★ 課題となる小問 ★

漢字を書く

大問2(2)①

<ねらい> 小学校で学習した漢字を正しく書いている。

目標値 40.0% 正答率 26.6% 差 ▲ 13.4 ポイント

指導のポイント 漢字に習熟させるためには、日頃から生徒が漢字に触れる機会をできるだけ増やす必要がある。特に漢字を書く力を養うためには、実際に書く活動を通して、漢字を正しく用いる習慣を身に付けていくことが重要となる。文脈に即して漢字を適切に用いることができるよう、授業において意図的に取り上げるなどの工夫をしながら、学習させることが大切である。

文学的な文章の内容を読み取る

大問5(1)

<ねらい> 登場人物の心情について、描写を基に捉えている。

目標値 60.0% 正答率 54.6% 差 ▲ 5.4 ポイント

指導のポイント 本問で「藤町先生がバツをつけた」理由を考える際、注意したいのは「藤町先生」の発言である。「藤町先生」の発言を押さえながら文章を読んでいくと、「志鳥と相談していないこと」「オリジナルな視点がないこと」について、「藤町先生」が納得していないことが分かる。文学作品を読むときに大事なことは、場面の展開を押さえつつ、作品全体について理解していくことである。それにより、この文章では「藤町先生」の最後の発言に、先生の言いたいことがまとめられていることに気付くことができる。

「知識・技能」の定着に課題が残る

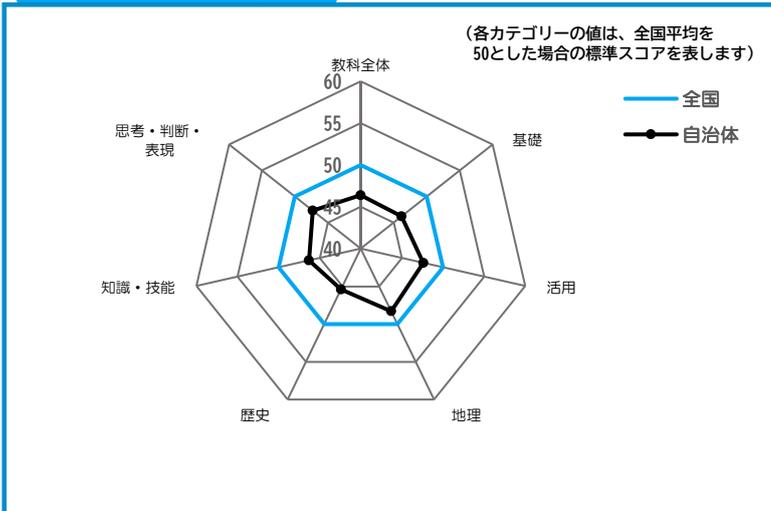
正答率一覧

		目標値	自治体	(%)
教科全体		55.2	49.0	
基礎		59.0	51.8	
活用		46.1	42.4	
領域別	地理	53.3	49.6	
	歴史	57.0	48.3	
観点別	知識・技能	59.8	52.9	
	思考・判断・表現	46.0	41.1	

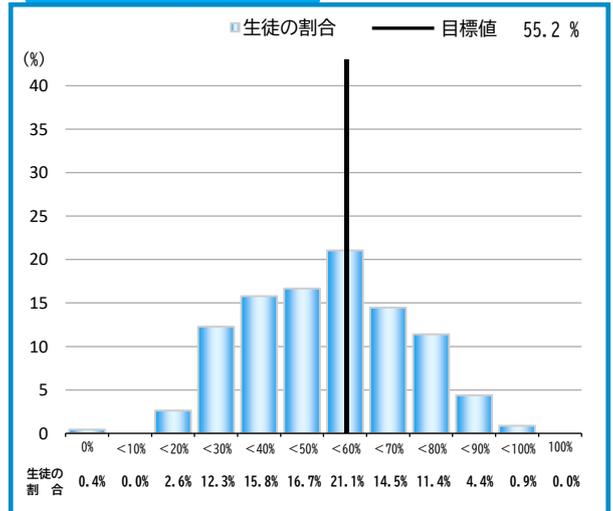
分析 コメント

- 中1地歴は、教科全体の正答率が49.0%で、目標値を6.2ポイント下回った。
- 観点別に正答率を見ると、すべての項目で目標値に届かなかった。中でも、「知識・技能」が52.9%で、目標値を6.9ポイント下回った。

カテゴリ間比較



正答率度数分布



★ 課題となる小問 ★

飛鳥時代～平安時代

大問6(5)

<ねらい> 仮名文字の成立について理解している。

目標値 75.0% 正答率 39.0% 差 ▲ 36.0 ポイント

指導のポイント 平安時代に、中国から影響を受けつつ、日本の風土や生活、日本人の感情に合った文化(国風文化)が生まれたことを捉えさせる必要がある。具体的には、日本独自の仮名文字が発明され、それを使った文学作品が書かれたことなどに気付かせる。漢字を変形させ、日本語の発音を表せるように工夫した仮名文字が、感情を書き表しやすくなったことをしっかりと理解させることが大切である。仮名文字の発明により、女性による文学作品が多く生まれ、国風文化の特色になったことも押さえさせたい。

古墳時代まで

大問5(3)

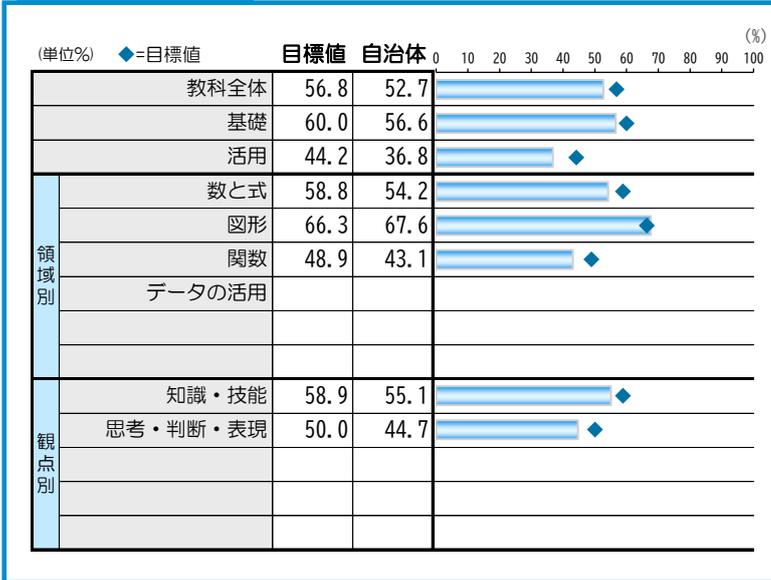
<ねらい> 縄文時代の暮らしについて理解している。

目標値 70.0% 正答率 40.4% 差 ▲ 29.6 ポイント

指導のポイント 古代文明がおこった頃、日本は縄文時代であったことを確認した上で、この時代の人々の生活の様子を押さえさせる。人々は、生活に必要な道具を、骨や石、木を使って作り、食べ物を煮炊きしたり貯蔵したりするために、表面に縄目のような文様のある縄文土器を使っていた。また、たて穴住居に定住し、住居の近くには貝塚ができていた。縄文時代の遺跡からは貝がらのほか、動物の骨や土偶が出土することにも触れておきたい。縄文時代の学習においては、弥生時代の学習内容と比較して指導することも大切である。

「思考・判断・表現」の定着に課題が残る

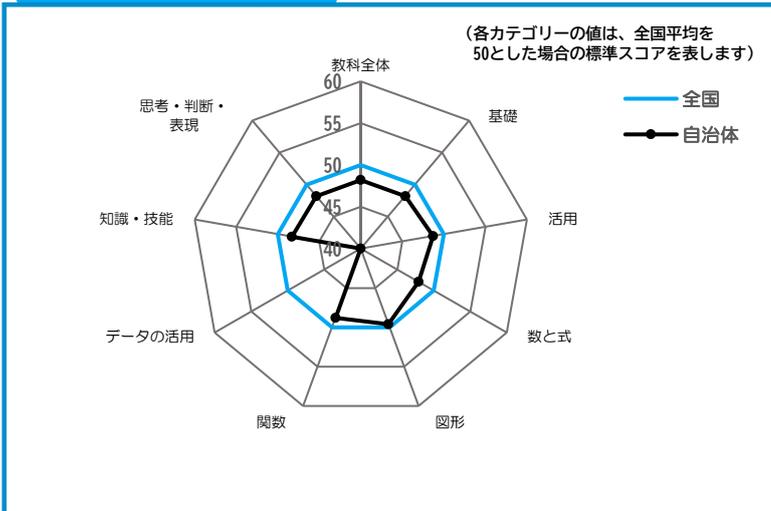
正答率一覧



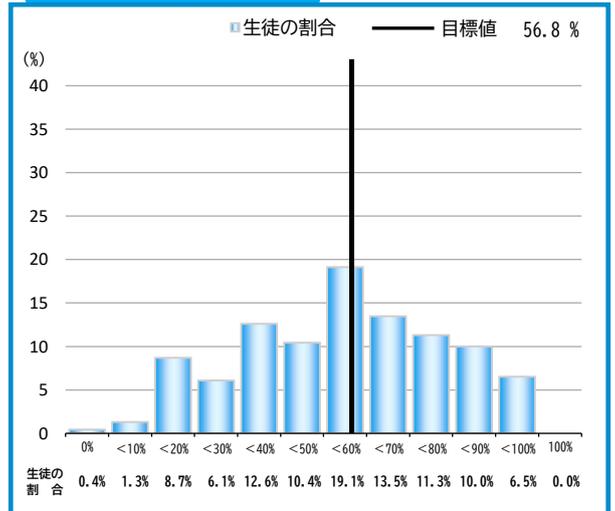
分析 コメント

- 中1数学は、教科全体の正答率が52.7%
- で、目標値を4.1ポイント下回った。
- 観点別に正答率を見ると、すべての項目で
- 目標値に届かなかった。中でも、「思考・
- 判断・表現」が44.7%で、目標値を5.3ポ
- イント下回った。

カテゴリ間の比較



正答率度数分布



★ 課題となる小問 ★

比例・反比例

大問17(2)

<ねらい>

事象を数学的に解釈し、1枚の重さの違いによる合計の枚数の差を求める方法を数学的に説明することができる。

目標値 30.0% 正答率 6.5% 差 ▲ 23.5 ポイント

指導のポイント

誤答の主な原因としては、比例のグラフを読み取ることができないこと、説明することに習熟していないことなどが考えられる。1枚の重さを2.5g又は3.5gとしたときのグラフから、写真の合計の重さが10000gのときの枚数の差はどこに表れているのか、図の中に印を付けさせ、枚数の差はyの値の差になっていることに気付かせる。そして、その流れを記述すればよいことを理解させる。普段の指導の中に、説明する場面を少しでも多く取り入れることで、説明することに慣れさせることが大切である。

文字式

大問5(1)

<ねらい>

文字式の表し方を理解している。

目標値 50.0% 正答率 36.1% 差 ▲ 13.9 ポイント

指導のポイント

文字式の表し方について、文字の混じった乗法では×を省くこと、文字と数の積では、数を文字の前に書くこと、同じ文字の積は累乗の指数を使って表すこと、文字の混じった除法では、÷を使わず分数の形で表すことなどを確認する必要がある。さらに、1あるいは-1と文字との積では、1を省略すること、 $a \times (-2)$ は、 $(-2)a$ ではなく $-2a$ とすること、 $(a+3) \div 4$ は $(a+3)/4$ ではなく、 $a+3/4$ のように括弧を付けずに表すこと、和と差の記号(+、-)は省けないことなどに注意させ、理解を定着させたい。

「思考・判断・表現」の定着に課題が残る

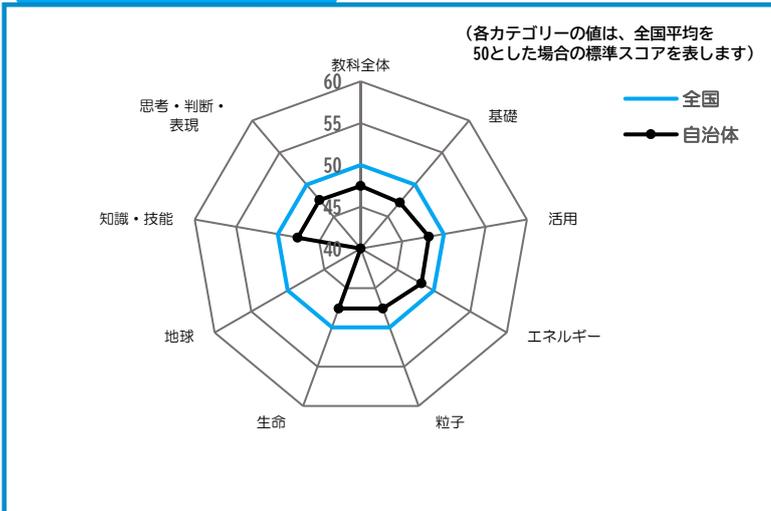
正答率一覧

		目標値	自治体	(%)
教科全体		56.6	51.9	
基礎		57.8	52.6	
活用		54.5	50.6	
領域別	エネルギー	43.8	35.2	
	粒子	52.9	46.7	
	生命	67.0	65.7	
	地球			
観点別	知識・技能	60.9	57.0	
	思考・判断・表現	50.0	44.0	

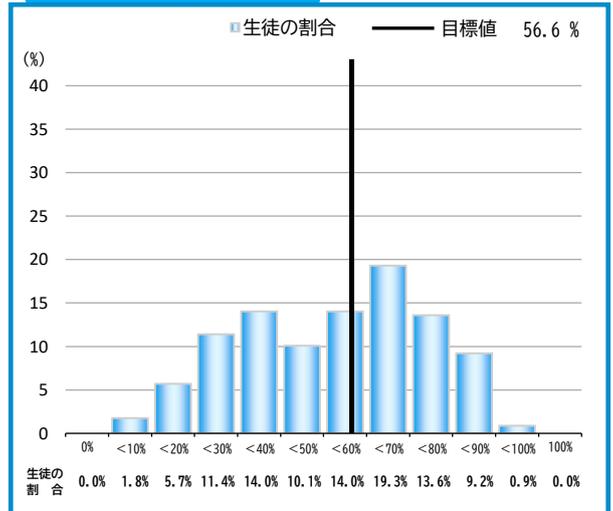
分析 コメント

- 中1理科は、教科全体の正答率が51.9%で、目標値を4.7ポイント下回った。
- 観点別に正答率を見ると、すべての項目で目標値に届かなかった。中でも、「思考・判断・表現」が44.0%で、目標値を6.0ポイント下回った。

カテゴリ間比較



正答率度数分布



★ 課題となる小問 ★

光の性質

大問7(2)

<ねらい> 直方体のガラスに入射した光が、外に出ていくときの光の道筋を作図できる。

目標値 40.0% 正答率 11.8% 差 ▲ 28.2 ポイント

指導のポイント 光源装置の実験では光の道筋があり、その道筋を基に反射・屈折を考えるので、本問のような出題をされると戸惑う生徒もいるであろう。誤答の場合、反射・屈折で光がどのように進むのかを丁寧に確認させたい。物質中を進む光は直進すること、反射・屈折は物質の境界面のみで起こること、光が反射するとき入射角と反射角は等しくなること、空気中からガラス中へ光が斜めに進むときは入射角 > 屈折角となる屈折をし、逆にガラス中から空気中へ進むときは入射角 < 屈折角となる屈折をすることを理解させる必要がある。

水溶液の性質

大問5(2)

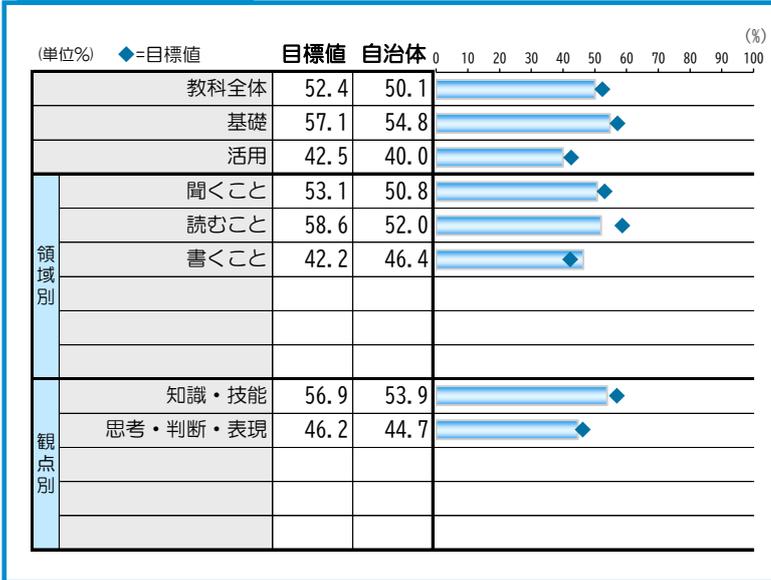
<ねらい> 再結晶でとり出される結晶の質量の違いを正しく比較できる。

目標値 30.0% 正答率 16.7% 差 ▲ 13.3 ポイント

指導のポイント 本問では、3つの物質がどのような状態になっているのかを、表の数字から確認する必要があるため、混乱する生徒もいるであろう。誤答の生徒には、表の60°Cの数値から、それぞれの物質が実験①でどのような状態であるのかを考えさせたい。塩化ナトリウムとミョウバンは飽和するため、溶液の中にはそれぞれ39.0g、57.4g、硝酸カリウムは飽和していないため70gだけ溶けていると気づき、70gから表の40°Cのときの各数値を基に差を求める計算は、意味のないことであると分かるようになる。結晶の析出量について指摘し、それぞれの物質で計算させると、生徒の理解が進む。

「知識・技能」の定着に課題が残る

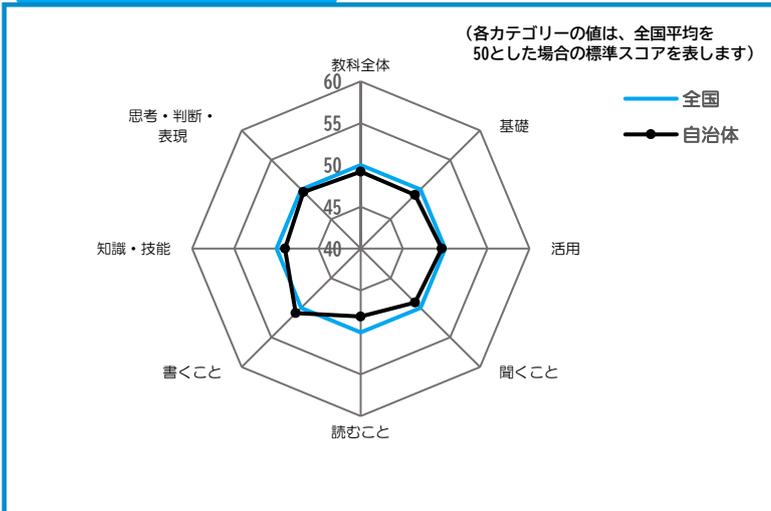
正答率一覧



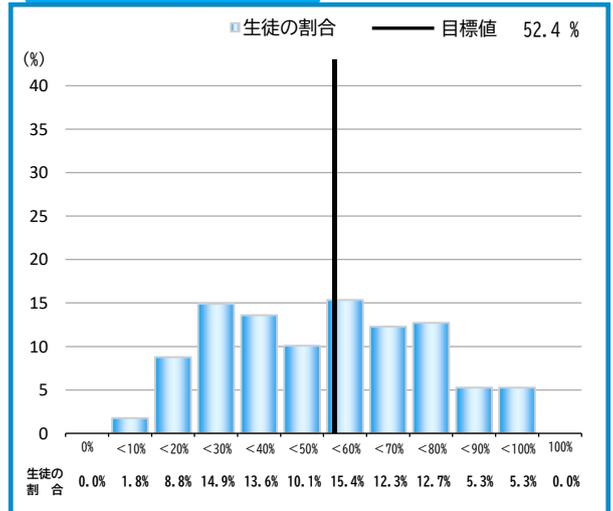
分析 コメント

- 中1英語Aは、教科全体の正答率が50.1%で、目標値を2.3ポイント下回った。
- 観点別に正答率を見ると、すべての項目で目標値に届かなかった。中でも、「知識・技能」が53.9%で、目標値を3.0ポイント下回った。

カテゴリ間比較



正答率度数分布



★ 課題となる小問 ★

語形・語法の知識・理解

大問5(1)①

<ねらい>

対話文を読み、文構造や文法事項を理解している。(一般動詞の三人称単数現在形)

目標値 60.0% 正答率 9.2% 差 ▲ 50.8 ポイント

指導のポイント

いわゆる3単現の問題である。授業においては、3単現という言葉はできるだけ使わずに指導したい(塾での学習や高校入学後の対策として知っておくことは構わない)。そもそも3人称という言葉自体、3単現の指導でしか使われないこともあり、人称を説明することにどれだけの意味があるかは疑問である。指導においては、I, you以外の単数主語のときは動詞にs, esが付くとすればよい。まずは主語が単数か複数かを認識させて、単数のときはs, esを付けるが、Iとyouだけは例外とすれば理解しやすいのではないだろうか。

リスニング(対話文の応答)

大問4

<ねらい>

対話から必要な情報を聞き取り、資料をもとに英語で答えている。

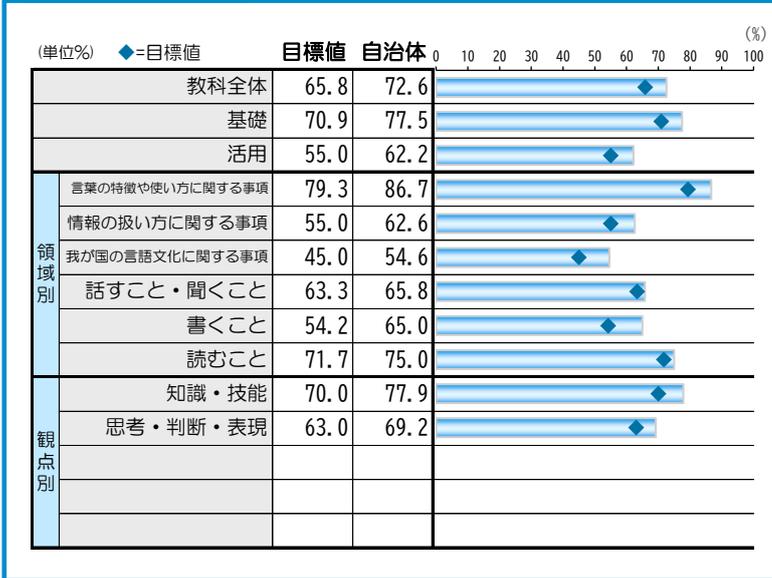
目標値 30.0% 正答率 11.0% 差 ▲ 19.0 ポイント

指導のポイント

“We can enjoy singing songs.”“We can enjoy Karaoke.”などの答えが考えられる。リスニングの指導としては、聞き取りの後で答え合わせをして終わりではなく、必ずスクリプトを準備して、答え合わせをした後にスクリプトを見せながら再度聞かせ、答えに当たる部分を確認することが大切である。また、スクリプトを音読させることも、聞く力の向上につながっていくので、音読の機会を意識して設けるとよい。

「知識・技能」が良好である

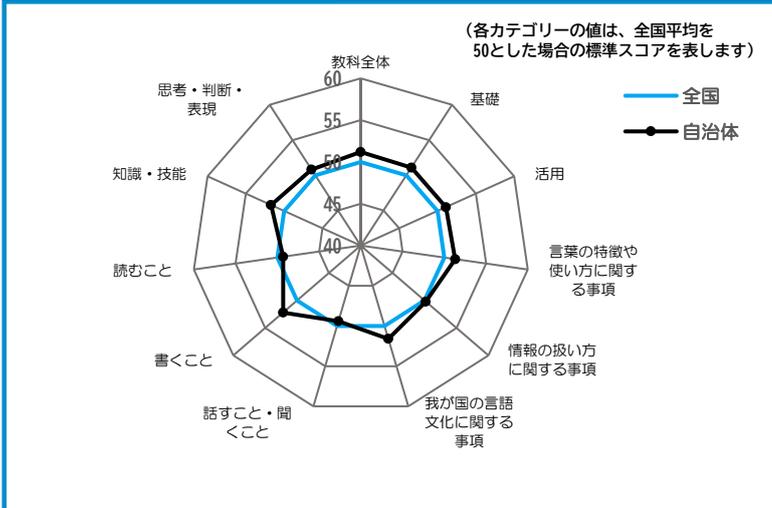
正答率一覧



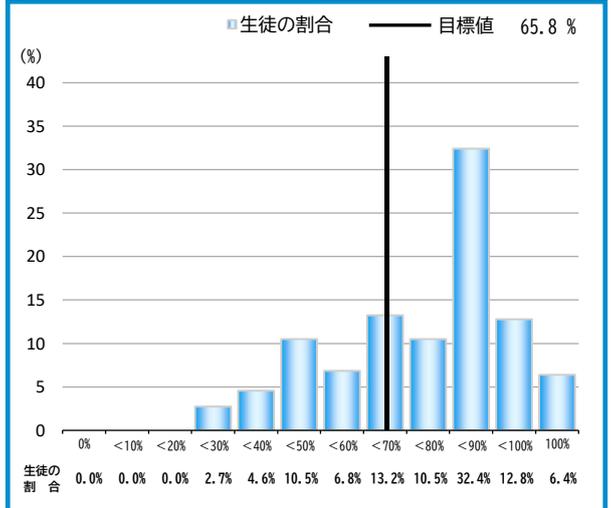
分析 コメント

- 中2国語は、教科全体の正答率が72.6%
- で、目標値を6.8ポイント上回った。
- 観点別に正答率を見ると、すべての項目で
- 目標値に達している。中でも、「知識・技能」が77.9%で、目標値を7.9ポイント上
- 回った。

カテゴリ間の比較



正答率度数分布



★ 課題となる小問 ★

発表の内容を聞き取る

大問1(2)

<ねらい>

自分の考えが明確になるように、話の構成を工夫している。

目標値 80.0% 正答率 78.1% 差 ▲ 1.9 ポイント

指導のポイント

本問では、話し手が調べたことを発表する際、自分の考えが明確になるように、話の構成をどのように工夫していたかを捉える必要がある。そのためには、話し手の話す内容だけでなく、どのように話しているのかということについても、注意深く聞かなくてはならない。このように話し手の話し方を意識して聞くことは、今後、自分が発表する際の工夫にもつながる。話し合いや発表の際に、その様子を動画に収めて再生するなど、話し方の工夫について押さえた指導をしていくことが重要である。

文学的な文章の内容を読み取る

大問5(3)

<ねらい>

文章を読んで考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを深めている。

目標値 75.0% 正答率 74.4% 差 ▲ 0.6 ポイント

指導のポイント

文章を読んで自分の考えを深めていくためには、知識や経験と結び付けたり、他者と考えを交流したりしていくことが有効である。文学的な文章では、同じものを読んでも、考えたり感じたりするところに違いが出る。そうした違いを交流することで、考えが深まったり新たな発見があったりする。本問では、「僕」の心情をめぐり、「上野さん」の話したこと、「山口さん」が何かに気付いていることが分かる。さまざまなことを結び付けるように意識しながら読むことを、まず教師自身ができるようになりたい。

「知識・技能」の定着に課題が残る

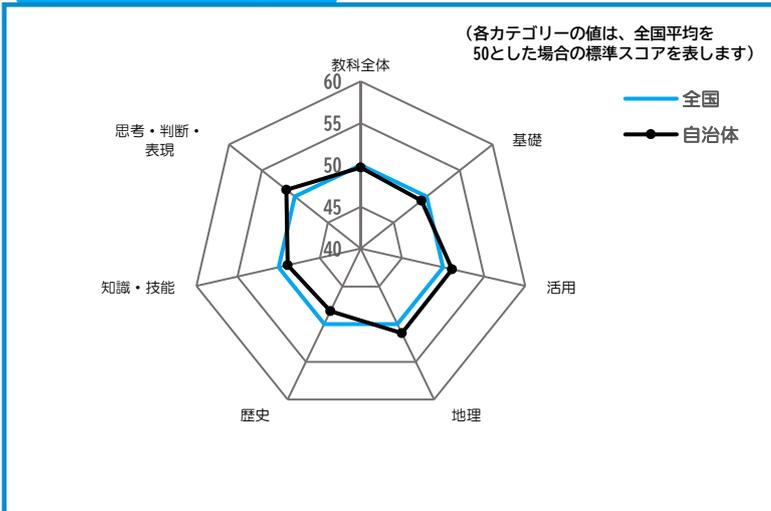
正答率一覧

		目標値	自治体	(%)
教科全体		51.8	52.0	
基礎		54.5	53.3	
活用		44.4	48.4	
領域別	地理	55.7	60.8	
	歴史	48.0	43.2	
観点別	知識・技能	53.3	51.3	
	思考・判断・表現	49.0	53.4	

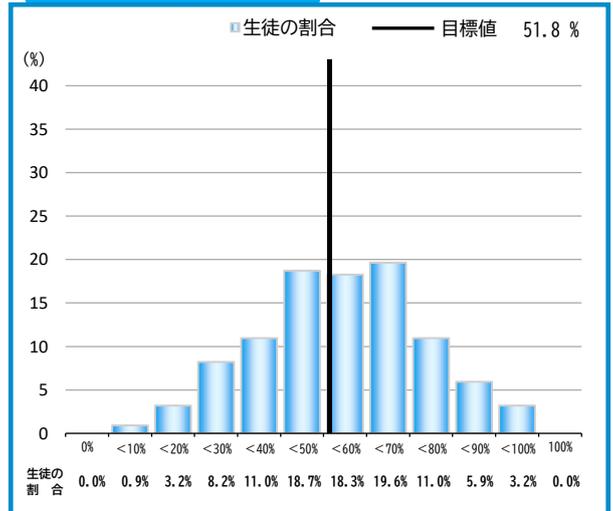
分析 コメント

- 中2地歴は、教科全体の正答率が52.0%で、目標値を0.2ポイント上回った。
- 観点別に正答率を見ると、「思考・判断・表現」が53.4%で、目標値を4.4ポイント上回った。一方、「知識・技能」が51.3%で、目標値を2.0ポイント下回った。

カテゴリ間比較



正答率度数分布



★ 課題となる小問 ★

江戸時代

大問4(4)

<ねらい> 蘭学について理解している。

目標値 45.0% 正答率 27.4% 差 ▲ 17.6 ポイント

指導のポイント 江戸時代後半、オランダ語で西洋の文化を学ぶ蘭学を通して、近代的な学問や技術が学ばれるようになった。享保の改革において、実学を重んじる徳川吉宗が、キリスト教に関係のない漢訳洋書の輸入を解禁したことにより、西洋の技術や学問が流入するようになり、蘭学が発展したことを理解させるとよい。また、杉田玄白や前野良沢らが、オランダ語の医学書を翻訳して「解体新書」を出版したことで、蘭学の基礎が築かれたこと、伊能忠敬がヨーロッパの天文学や測量術を学んだために、日本地図(伊能図)を作ることができたことも押さえさせる必要がある。

ヨーロッパ人との出会いと全国統一

大問3(1)

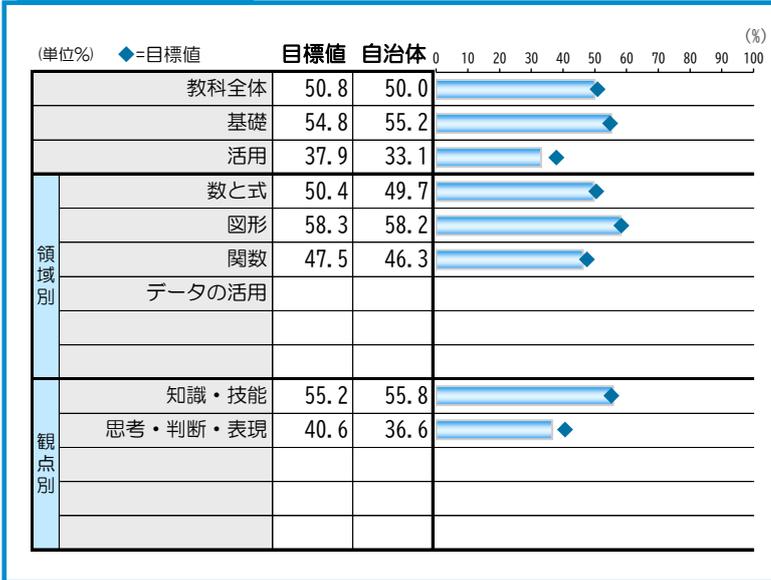
<ねらい> ヨーロッパとイスラム世界との交流について理解している。

目標値 60.0% 正答率 44.3% 差 ▲ 15.7 ポイント

指導のポイント まず、ルネサンスは14世紀から16世紀にかけて、イタリアの都市から始まり、西ヨーロッパ各地に広がったことを確認させる必要がある。ルネサンスは人間らしさを求める新しい文化の動きで、当時のヨーロッパに自由な気風と学問・芸術の発達をもたらしたことで、レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロが活躍したことを押さえさせたい。特に、天文学や地理学が発達し、羅針盤や天体観測に基づく航海術が進歩して、大航海時代が始まったこと、羅針盤のほかにも火薬や活版印刷の発明が、その後の歴史に大きな影響を与えたことなどを理解させることが大切である。

「思考・判断・表現」の定着に課題が残る

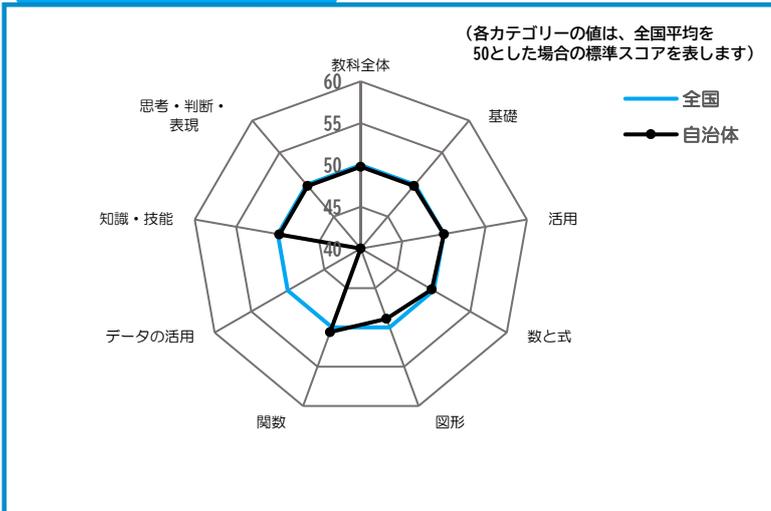
正答率一覧



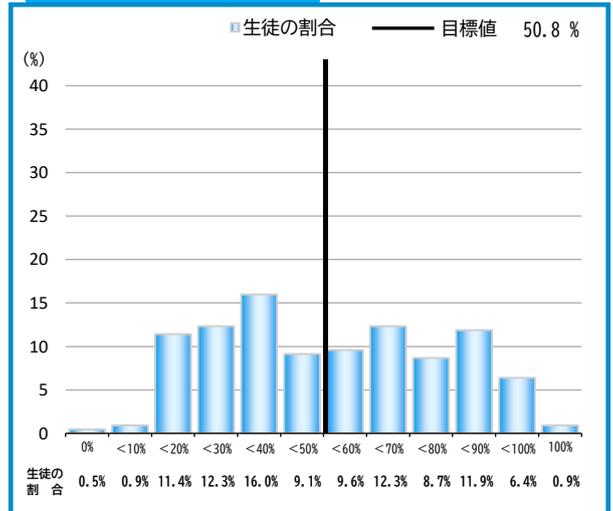
分析 コメント

- 中2数学は、教科全体の正答率が50.0%で、目標値を0.8ポイント下回った。
- 観点別に正答率を見ると、「知識・技能」が55.8%で、目標値を0.6ポイント上回った。一方、「思考・判断・表現」が36.6%で、目標値を4.0ポイント下回った。

カテゴリ間比較



正答率度数分布



★ 課題となる小問 ★

1 次関数

大問17(2)

<ねらい>

「手芸用品店Aがもっとも安くなる」ときの「ある長さ」を、グラフから読み取る方法について説明することができる。

目標値 30.0% 正答率 5.9% 差 ▲ 24.1 ポイント

指導のポイント

誤答の主な原因としては、グラフを正しく読み取れないこと、グラフは読み取れるがどのように説明すればよいのかが分からないことなどが考えられる。「ある長さ」を、【購入するリボンの長さの合計と費用】のグラフから読み取る方法を説明するのであるから、交点のx座標を具体的に答えるのではなく、「A店のグラフとB店のグラフの交点のx座標を読み取る」といったように説明する必要があることを理解させたい。普段から、グラフの傾きや切片、交点の意味などを考えさせる指導を行い、説明できるようにさせることが大切である。

1 次関数

大問6(2)

<ねらい>

示された1次関数の変化の割合から、xの値に対応するyの値を求めることができる。

目標値 30.0% 正答率 17.8% 差 ▲ 12.2 ポイント

指導のポイント

誤答の原因としては、1次関数の変化の割合に習熟していないこと、1次関数の関係を表す表の見方が分からないことなどが考えられる。xが4から8まで増加するとき、(yの増加量) = (変化の割合) × (xの増加量) と表されるので、(yの増加量) = $1/4 \times (8 - 4) = 1$ となり、空欄の値は $-4 + 1 = -3$ と求められることを理解させたい。また、別解として、1次関数を $y = ax + b$ と置き、ここへ変化の割合 $1/4$ と、表から $x = 4, y = -4$ を代入して計算すると、 $y = 1/4x - 5$ となる。この式に $x = 8$ を代入すれば、 $y = -3$ が求められることにも触れておくとよい。

「知識・技能」の定着に課題が残る

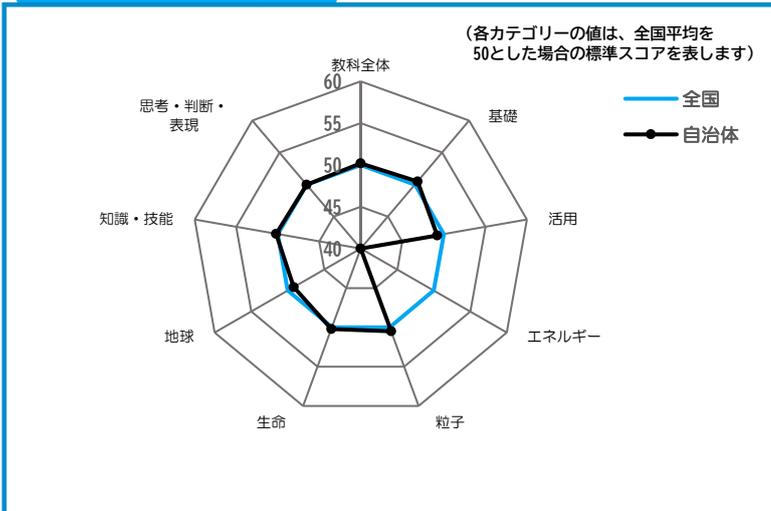
正答率一覧

		目標値	自治体	(%)
教科全体		52.7	50.9	◆
基礎		55.5	53.5	◆
活用		44.3	43.1	◆
領域別	エネルギー			
	粒子	53.8	52.6	◆
	生命	54.6	54.6	◆
	地球	43.8	34.2	◆
観点別	知識・技能	55.8	53.5	◆
	思考・判断・表現	45.0	44.3	◆

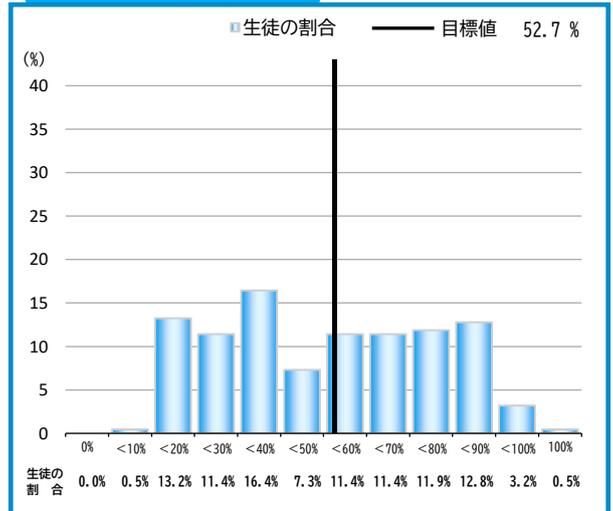
分析 コメント

- 中2理科は、教科全体の正答率が50.9%
- で、目標値を1.8ポイント下回った。
- 観点別に正答率を見ると、すべての項目で
- 目標値に届かなかった。中でも、「知識・
- 技能」が53.5%で、目標値を2.3ポイント
- 下回った。

カテゴリ間の比較



正答率度数分布



★ 課題となる小問 ★

気象の観測

大問11(2)

<ねらい> 木片の大きさを変えたときに圧力がどのように変わるかを推察できる。

目標値 50.0% 正答率 26.9% 差 ▲ 23.1 ポイント

指導のポイント 本問は、計算をしなくても感覚的に答えられる問題であるが、わり算に苦手意識をもつ生徒は、圧力は難しいと解答を避ける場合がある。同じ力を加えても、接触する面を変えるとへこみ方が変わることを、身近な例を挙げて説明し、確認させたい(ペットボトルを、スポンジの上に普通に置いた場合と、蓋を下にして置いた場合のへこみ方の違いなど)。柔らかいスポンジの上に板を乗せた実験の様子から、雪の上のスキー板を連想してスキー板と解答する生徒には、接触面が変化していないことを指摘して、画びょうが適切であることに気付かせるるとよい。

物質の成り立ち

大問1(2)

<ねらい> 水の電気分解で発生する気体の性質を理解している。

目標値 50.0% 正答率 32.4% 差 ▲ 17.6 ポイント

指導のポイント まず、酸素の中に火のついた線香を入れると、線香が炎を出して激しく燃えるのに対し、水素に火のついたマッチを近づけると、ボンと音を立てて燃えることを押さえさせる。その上で、本問の実験において、陽極に発生した気体の中に、火のついた線香を入れた場合の結果、陰極に発生した気体に、火のついたマッチを近づけた場合の結果について確認させたい。その際、気体の可燃性と助燃性の違いを理解させることが大切である。授業の中で、気体そのものが燃える現象と、気体が他の物質の燃え方を大きくする現象の違いを体験させるとよい。